日本臨床救急医学会

徳洲会グループから37演題 多職種が多様なテーマで発表

徳洲会グループは大阪市内で開かれた第29回日本臨床救急医学会総会・学術集会で16病院が37演題を発表した。一部を紹介する。



佐藤・副センター長（左の写真）と宮田主任は同じテーマのシンポジウムで登壇


重田・救急救命士は自院救急の有効性を発表

「徹底活用！『救急外来における薬剤師業務の進め方』」をテーマとしたシンポジウムで、札幌東徳洲会病院の佐藤洋祐・集中治療センター副センター長、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の宮田祐一・薬剤部主任がそれぞれ発表した。

佐藤・副センター長は「救急外来に薬剤師はどう機能するか―業務指針を起点とした実践と深化」と題し、救急外来に薬剤師が常駐している自院の取り組みを紹介。近年、複数の医療機関を受診し多剤併用（ポリファーマシー）状態にある高齢患者さんが救急外来を受診するケースが増えていると指摘。中毒症例における毒性の評価、急性期脳卒中でのtPA投与や敗血症への適切な抗菌投与など、自院が経験した具体例も示しながら、薬剤師が救急外来に携わる意義の大きさを強調した。搬送件数が増えてもスムーズに対応できるのは「救急外来に薬剤師が常駐しているから」とも説明した。

最後に、服薬情報の迅速な整理は診断精度と診療効率の両方を高めるとし、薬剤師の関与はかつての「調剤」にとどまらず「治療判断を支える臨床パートナー」へ広がっていると指摘、「各施設の実情に応じた薬剤師の参画が、患者安全と診療効率の改善につながります」と結んだ。

宮田主任は「初期診療」をテーマに、救急外来に患者さんが搬送された後の初期診療で薬剤師の役割を説明。自院では、2017年4月から救急外来に薬剤師を専従配置していることを紹介し、薬歴情報の把握と薬学的評価を中心に初期診療に従事している様子を紹介した。

加えて、救急外来専従薬剤師は、薬歴把握を起点に、得られた情報と現病歴をふまえ、救急医と各科専門医に薬剤起因性疾患の可能性、服薬管理上の問題点の指摘、必要な検査や治療薬の提案、今後の検査・治療方針や入院後治療への反映について情報提供・提言も行っていることを明かした。将来、薬歴情報の把握はマイナ保険証から得られる可能性も示唆したが、医師の診療の一助になったり、プラスアルファの情報を提供したりするには、薬剤師がしっかりかかわる必要性を指摘した。

最後に、初期診療では心肺蘇生時の補助、薬剤の準備・調整、患者情報の収集、薬学的評価、薬物治療への提案などに、薬剤師が早期から介入する重要性を強調。また、初期診療の情報収集では、薬歴の把握にとどまらず、薬剤起因性疾患の可能性、既往歴、今後の治療方針に影響を及ぼす情報など、「“薬学的視点を生かしたプラスアルファの情報提供”が薬剤師に求められていると考えます」と結んだ。

病院救急増で消防救急減に寄与

パネルディスカッションでは、大和徳洲会病院（神奈川県）の重田光貴・救急救命士が発表した。テーマは「病院救命士主体の病院救急車の活用と消防転院搬送数の変化～院内資源活用による地域救急への影響の検討～」。

消防救急車の適正利用が求められるなか、同院は23年度に病院救命士を主体として病院救急車を運用し転院搬送を行う体制を構築。25年12月までの取り組みを検証したところ、病院救急車出動件数は年々増加する一方、消防依頼転院搬送数は年々減少。25年は23年度比で約56%減少した。

重田・救急救命士は「院内資源の活用は、地域の救急体制において役割分担の再整理に寄与する可能性を示唆するとともに、転院搬送のあり方や制度設計を検討するうえでの基礎資料となり得ます」と締めくくった。

生駒病院

「不妊治療外来」を開設 手術行える環境が強み！


「不妊治療から小児医療まで一貫したケアを」と今村総長（左）、貴志部長

生駒市立病院（奈良県）は9月1日、不妊治療外来を開始した。産婦人科の外来内で予約に応じて対応し、今村正敏総長を含む同科男女5人の医師が担当する。これにともない、外来の枠を増設。従来は月～金曜日の午後4時までだったが、月・水曜日は午後7時まで延ばし、土曜日（午前）も行う。

同外来では、はじめに妊娠に至らない原因を探る。問診をはじめ検査も行い、主に女性患者さんには、血液検査やエコー（超音波）検査でホルモンの濃度や子宮の状態など、男性患者さんには精液検査で精子の質や量などを確認する。そのうえで治療を開始。まずは自然妊娠を目指し、排卵誘発剤を用いた治療や性交渉のタイミング指導など、患者さんの負担が少ない方法から始める。

同院が手がける強みは、原因究明の段階で手術（主に腹腔鏡）が必要になっても、院内で実施できる点だ。女性患者さんの場合、エコーの結果によって当日中にMRI（磁気共鳴画像診断）検査を行い、不妊症との関連が考えられる子宮内膜症などが指摘されれば、手術を行う。男性患者さんにも、院内の泌尿器科などと連携して対応することが可能だ。

貴志洋平・産婦人科部長は「不妊治療外来を手がける一般のクリニックでは、手術ができないことが多い。当院であれば複数の医療機関を行き来する負担はありません」と強調する。南亜希・産婦人科医師も「妊娠を考え始めたら、セルフチェックのような気持ちで来院してほしい」と呼びかける。

同院は次のステップとして「体外受精の導入」を掲げ、2028年までに環境を整える方針。今村総長は昨年度、約240件の分娩に対応したことなどをアピール。「産科医療を起点に、不妊治療から小児医療まで、一貫したケアを広げていきたいです」と抱負を語る。

初期臨床研修指導医養成講習会

指導医の心構えやスキル学ぶ 宇治徳洲会病院



北海道から沖縄県までグループ内外の医師29人が参加

宇治徳洲会病院（京都府）は、院内で今年度の初期臨床研修指導医養成講習会を開いた。臨床現場で研修医を教育する臨床研修指導医（指導医）の養成を目的に、2023年度から年1回主催しているイベントで、プログラムは厚生労働省の「医師の臨床研修に係る指導医講習会の開催指針」に準拠。4回目となる今回は徳洲会グループ内外から29人の医師が受講した。ディレクター（主催責任者）は末吉敦院長（徳洲会グループ研修部門統括責任者）、チーフタスクフォース（企画責任者）やタスクフォース（世話人）は福井道彦・集中治療科顧問をはじめ、同院の医師が多く務めた。受講者はeラーニングによる事前学習をすませたうえで臨んだ。

初日は、主にグループワークを実施。研修2年目修了時に期待する臨床能力や、研修医が研修目標を達成するための具体的な計画・準備、評価方法などをテーマとし、それぞれ最後に講師が解説した。また、末吉院長が講義も行い、国が進める医療の方向性や徳洲会グループの現状、自院の取り組みなどについて説明した。

2日目は「コーチングを用いたフィードバック」、「指導医のあり方」、「問題点への対応」などをテーマに、講義やグループワークを行い、最後に全員が修了証を受け取った。

唯一、離島から受講した徳之島徳洲会病院（鹿児島県）の太拓也・外科医師は「自分が研修医だった10年ほど前と研修のあり方がだいぶ変わっていると感じました」と振り返った。

福井顧問はスタッフの世代交代が進んだ点を評価。「最前線で働いている中堅層の医師がタスクフォースなどで参加してくれるのは、“最大の資産”。若い力で講習会がアップデートしていくめどが立ったように思います」と、期待を込めていた。

佐藤・東京西病院名誉院長

立川市がん条例イベントで講演


地域のがん医療について提言する佐藤・名誉院長

東京西徳洲会病院の佐藤一彦・名誉院長（包括的がん診療センター長兼乳腺腫瘍センター長）は、「立川市がん条例制定記念シンポジウム」で講演した。

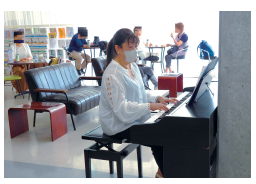
シンポジウムは、条例の制定にも尽力した乳がんを中心とする女性特有のがん患者会「NPO法人ブーゲンビリア」（内田絵子・統括理事長）が主催。酒井大史・立川市長をはじめ、行政関係者や市議会関係者、市民らが多数参加した。

佐藤・名誉院長は「地域主導のがん医療の現状とその課題」と題し、専門とする乳がんを例に、立川市を含む北多摩西部医療圏（二次医療圏）のがん医療について課題を指摘。専門医偏在の是正、施設間や多職種の連携強化などを挙げ、がん条例の制定で解決に期待しつつも、「まだスタートの段階。いかに条例を育て、地域に落とし込んでいくかが大事」と強調した。

続く第3部でもシンポジストのひとりとして登壇。がんに対する地域住民のリテラシー（ある分野の情報を理解・活用する基礎的な能力）を皆で高めていく重要性を説いた。

武蔵野病院が院内ピアノコンサート

がん治療受けた患者さん演奏


ピアノの調べが辺りを包み、癒やしのひと時を提供

武蔵野徳洲会病院（東京都）は8月28日、院内ピアノコンサートを開催した。ボランティアで奏者を務めたのは、定期検査のため通院している髙橋智子さん。1階の休憩スペースにある電子ピアノを奏で、患者さんや家族に癒やしのひと時を提供した。

髙橋さんは過去に東京西徳洲会病院で乳がんの治療を受け、10年経過後の検査で腎臓がんが見つかり、武蔵野病院でロボット支援手術を受けた。


「感謝の気持ちを込めて弾きました」と髙橋さん

「どちらの病院でも職員の方々に本当によくしていただきました。感謝の気持ちをお返しできるとすればピアノ演奏かなと思い、奏者を務めました」。髙橋さんは幼少期から長年、本格的にピアノを修練した経験をもつ。

「海の見える街」、「夜の踊り子」といったポップスや、クラシックの「もみの木」など披露。午後12時半に演奏を開始し、昼食を取る手を止めて聴き入る聴衆の姿が見られた。弾き終えた髙橋さんは「ホッとしました。気持ちを込めて弾きました」と振り返った。

三味線と民謡に聴衆も大合唱

八尾病院が院内会議室で演奏会


瓜生副院長は三味線だけでなく民謡も披露

八尾徳洲会総合病院（大阪府）は9月5日、院内会議室で入院患者さんを対象とした三味線と民謡のコンサートを開催した。演目は、福島県の「会津磐梯山」や熊本県の「おてもやん」、大阪府の「淀川三十石船舟歌」など。

日本民謡皐月会の大平佳美会主が率いる会のメンバーと、尺八奏者の松葉隆山さんによる演奏に、参集した患者さんら59人は静かに耳を傾けていた。ソーラン節と、こきりこ節の2曲は聴衆も含め大合唱となり、思い思いに声を張り上げた。

同院ではこれまでも院内コンサートを開催してきたが、新型コロナ感染症の影響で中断、今回は華々しいリスタートとなった。演奏会の発起人である瓜生恭章・副院長兼腫瘍内科部長は「今後もコンサートを続けていきたい」と意欲的で、今年度中にあと2回開催予定。次回はジャズコンサートを企画している。


参集した患者さんや職員による大合唱も